

境界 2

私は予定されていなかった。

人生を遠くから眺めれば、すべてに意味があるように見える。

点と点がつながる。

出来事は説明を見つける。

転機は必然に見える。

過ちさえ、ひとつの図案の一部に見える。

だがこれは、現在に属する錯覚だ。

物事を生きているとき、地図など存在しない。

存在するのはただ日々だけだ。

そして日々の中に説明はない。

あるのは決断だ。

若い頃、大人たちは自分のしていることを分かっているのだと思っていた。

教師たちは生徒の未来を知っているのだと思っていた。

会社は人の可能性を見抜けるのだと思っていた。

世界には秩序があるのだと思っていた。

やがて、もっとずっと単純な真実を知った。

何が起こるか、本当に知っている者などいない。

みんな航海している。

それを認める者もいる。

認めないふりをする者もいる。

自分の人生を眺めても、誰かがこう言った瞬間を見つけない。

「この人間は遠くまで行くだらう。」

誰も私を待ってはいなかった。

優先レーンは存在しなかった。

あらかじめ用意された図面は存在しなかった。

私は誰のお気に入りでもなかった。

そして、正直に言えば、この発見が私を自由にした。

なぜなら誰にも待たれていないとき、人は他人の期待に応えるために生きるのをやめるからだ。

自分の道を築き始める。

一歩ずつ。

多くの人、他人が自分のために作り上げた像に見合おうとして一生を過ごす。

私には別の有利があった。

その像が存在しなかった。

だから私は早くから不確かさとともに生きることを学んだ。

物事が変わっても怯えないことを。

変化を脅威と見なさないことを。

型にはまらない道を過ちとして扱わないことを。

人生は一度も、私の計画に従うことを気にかけなかった。

そして時とともに、そうしてくれと求めないことを学んだ。

すべてが正しい方向へ進んでいるように見えた時期があった。

その正反対が起きているように見えた時期もあった。

不可欠に見えて、消えていった人々。

決定的に見えて、取るに足らないと判明した機会。

脇道に見えて、中心になっていった道。

その後の歳月の流れを変えた偶然の出会い。

真実は、未来は驚かせることを好むということだ。

許可を求めない。

事前の通知を送らない。

序列を尊重しない。

ただ、やって来る。

そしてしばしば、誰も見ていない方角からやって来る。

私の存在を決定づけた物事の多くは、そうして生まれた。

回り道から。

偶発事から。

起きているその瞬間には、偉大さの気配など少しもなかった出来事から。

時間がいくらか厳しく私に教えてくれた教訓を覚えている。

予測可能性と価値を混同してはならない。

予測できるものは安心させる。

価値あるものは変容させる。

この二つが一致することはめったにない。

何年ものあいだ、私は市場を、企業を、数字を、組織を観察しながら働いた。

どこでも同じ確信に出会った。

すべてを予測することが可能だという確信。

現実は統御できるという確信。

未来は引ける一本の線だという確信。

だがいつも、その自信を裏切る何かがやって来た。

ひとつの変化。

ひとつの危機。

一人の人間。

ひとつの病。

ひとつの喪失。

ひとつの機会。

誰も計画に入れていなかった何か。

それでも、物語のいちばん面白い部分が始まるのは
まさにそこだった。

なぜなら人生は予測する能力を測らない。

適応する能力を測る。

この違いは根本的だ。

予測することは知性の営みだ。

適応することはアイデンティティの営みだ。

世界が変わるとき、勝つのは正しかった者ではない。

変化の内側で生きたままでいられる者が勝つ。

ときどき自問する。もし誰かが私の道のりの成り行きを正確に教えてくれていたら、どうなっていただろう。

恐れは少なかったかもしれない。

過ちは少なかったかもしれない。

苦しみは少なかったかもしれない。

だがそのとき理解する。学びはずっと少なかっただろうと。

なぜなら私が大切だと考えるものの大半は、確信から生まれていないからだ。

疑いから生まれた。

危険から。

保証の不在から。

自分がどこへ向かっているのか正確には知らないまま進む必要から。

その意味で、予定されていなかったことは特権だった。

私に築くことを強いた。

観察することを。

学ぶことを。

変わることを。

やり直すことを。

そのたびに。

何度も何度も。

今日、多くの人が承認を追い求める。

許可を待つ。

確認を探す。

受け入れられるかどうか、前もって知りたがる。

認められるかどうか。

理解されるかどうか。

私は公式を差し出すことはできない。

学んだことを語ることはできない。

たいていの場合、世界は君が存在することを知らない。

君を待っていない。

君に道を用意しない。

歓迎の式典を準備しない。

そして、たぶんそれでいい。

なぜなら道のりの価値は、それを予定していた者によって決まるのではないからだ。

それを渡り切る勇気を持った者によって決まる。

私は予定されていなかった。

待たれていなかった。

プログラムされていなかった。

それでも、ほら、私はここにいる。

後ろを振り返りながら。

点と点をつなぎながら。

時間の皮肉を前に微笑みながら。

なぜなら、結局のところ、いちばん面白い物語は前
もって書かれたものではないからだ。

存在するための道を自力で見つける物語だ。

そして私の物語は、良くも悪くも、この部類に属し
ている。